富士山大鳥居

吉田口登山道の起点

山梨県立富士山世界遺産センター

富士山大鳥居　　北口本宮冨士浅間神社（富士吉田市上吉田）

北口本宮冨士浅間神社（富士吉田市上吉田）の境内には、木造としては国内最大級を誇る巨大な鳥居がそそり立っています。大鳥居は、北面の登拝拠点である吉田（富士吉田市上吉田）の象徴であり、吉田口登山道の起点として、広く認識されていたようです。また、吉田の町の北端には唐銅鳥居（金鳥居（かなどりい））が立つほか、北口本宮西宮本殿の背後に位置する登山門は鳥居の形で表わされています。さらに登山道をたどりますと、馬返（うまがえし）や、果ては頂上直下でも鳥居が迎えてくれます。登山道の要所要所には、鳥居が存在しているのです。それだけではありません。史料や伝承を追っていきますと、吉田に至る道々にも鳥居が立っていたことがわかってきました。今回の企画展では、「富士山大鳥居」をはじめとする数々の鳥居を手がかりに、富士山の信仰について、考えていきたいと思います。

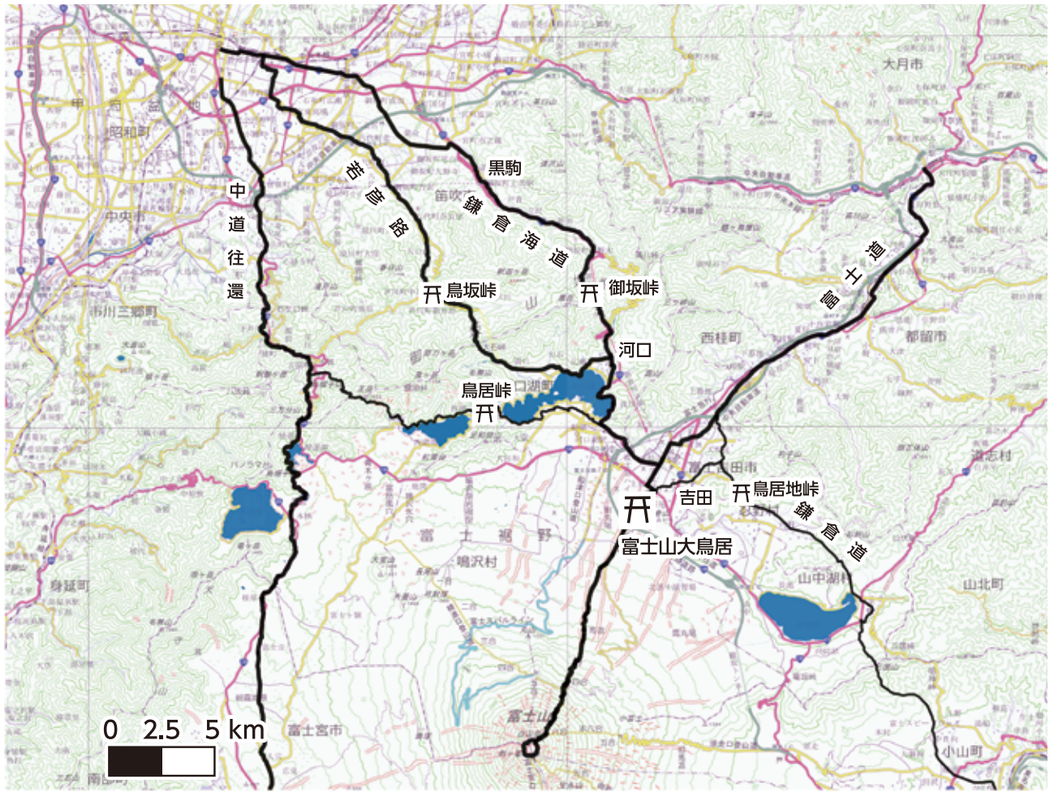
当センターでは、山梨県が平成20年度（2008）より継続している富士山総合学術調査研究の事務局を務めております。先般の調査活動では、幕末に描かれたとおぼしき絵画資料に行き当たりました。多くの図葉が「富士山明細図」の名で呼ばれている画集と共通していますが、着色以前のもので、その「草稿」ではないかと考えられます。ただ、「明細図」に含まれない図葉や、細部が相異する図葉が認められました。その一部につきましても、ご覧になっていただきたいと考えています。

令和元年（2019）7月

山梨県立富士山世界遺産センター

富士山北面の信仰世界

下の地図を見てみよう。富士山の北面における登山・観光の拠点として発展した富士吉田や河口湖周辺がおかれた地形がおおよそ理解されよう。北西には甲府盆地を隔てるように御坂山地が横たわる。南東へ目を転じると、神奈川・静岡両県との県境は、三国山稜が連なっている。これら二つの山地を越して、都と甲斐の国府を結んだのが、東海道の支道・甲斐路であった。富士山の北面は、交通の要地であったといってよい。15世紀ころから、吉田が登拝の拠点として発展し始めるのも、当然といえば当然といっていいかもしれない。江戸時代に入り、大月で甲州道中から分岐して桂川に沿って遡上する富士道の発展を見るが、これ以前の道者は、もっぱら峠越えのルートをたどっていた。駿相方面から延びる鎌倉道は、最後に忍草（忍野村）から大明見（富士吉田市）へ小さな峠を越えた。道者は明見湖（富士吉田市小明見）へ出て垢離をとり（潔斎のこと）、富士へと向かうこととなる。この最後に越えるべき峠を、鳥居地峠（鳥居内峠）といった。その名は、鞍部に立っていた鳥居に由来するらしい（現在では亡失）。甲府盆地からは鎌倉海道（御坂路、甲斐路の後身）が便利だった。この鞍部にも鳥居が立ち、それは「富士山一ノ鳥居」と呼ばれていた（同じく亡失）。鳥居に至った道者たちは、みなそこが富士山の信仰世界への入口であると意識せざるをえなかっただろう。こうした視点に立ったとき、若彦路上の鳥坂峠、西湖東岸と河口湖西岸を結ぶ鳥居峠と、鳥居に由来する峠の名が各所に存在していることに気づく。これらは、どのような性格をもっただろうか。富士山大鳥居をはじめ、登山道には多くの鳥居が立っている。いや、立っていた。これらの鳥居を概観することで、富士山に対する信仰の一端について考えてみたい。



富士山北麓要図　　作図：村石眞澄

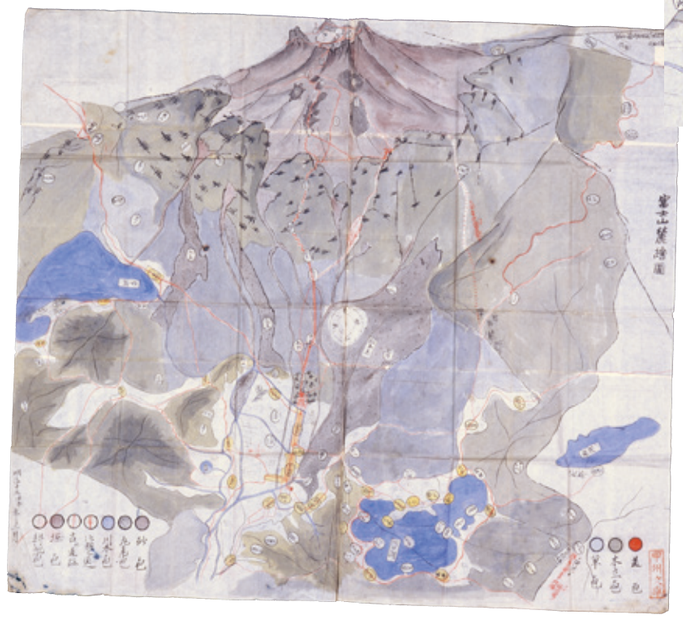
吉田口登山道の起点

甲斐国を代表する地誌「甲斐国志」（19世紀初頭）は、「採薬小録」なる文献に依拠して、〔駿河大納言様が富士山頂半と測り出したという〕と記す。駿河大納言とは、二代将軍徳川秀忠の次男（三代家光の弟）である忠長のこと。元和2年（1616）に甲斐を拝領、後に駿河ほかを加増され、駿府城（静岡市）に拠って、こう称された。寛永8年（1631）には除封されている。年月は判然としないものの、江戸時代初頭に、頂上までの道法を測定した際には、上吉田村鳥居を基点にして、357町7間というのである。その基点、つまり吉田口登山道の起点が、「上吉田村鳥居」=浅間社中に立つ大鳥居とされたのだった。ただし、現在では北口本宮冨士浅間神社西宮本殿右手後方に位置する登山門を登山道の起点とする意識が強くなっている。

13 上吉田村絵図
江戸時代（19世紀カ）

個人蔵
縦114.2㎝×横117.7㎝

中央に浅間社の社叢を描く。さらにその中央には、大鳥居が立つ。社叢の背後から登山道が富士山頂を目指す。大鳥居を登山道の起点とする意識がうかがえ、興味深い。



14 富士山麓絵図
明治15年（1882）

山梨県立博物館蔵〔甲州文庫〕
縦68.0㎝×横79.0㎝

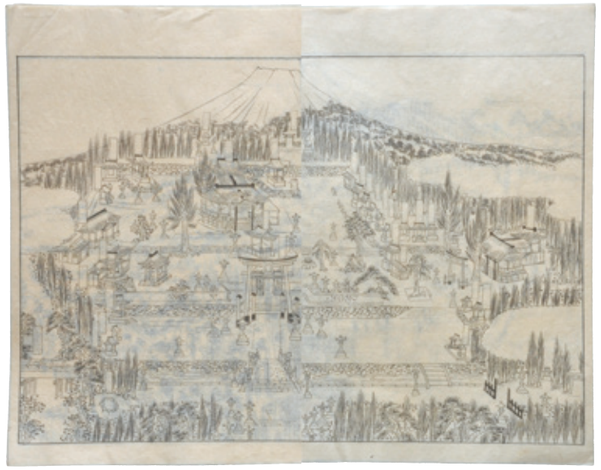
登山道が両部の鳥居をくぐって、社殿の背後から富士山頂へと延びている。近代以降も、大鳥居が登山道の起点と意識されていたことを物語る。

富士登山門　北口本宮冨士浅間神社

現在では、鳥居の両足に結んだ注連縄を断ち切る行事が、開山前夜祭（6月30日）のなかで執行されている。

「富士大鳥居浅間社」

北面の登拝拠点吉田（富士吉田市上吉田）に鎮座する浅間社（現在の北口本宮冨士浅間神社）の境内図は、いずれも本殿とともに大鳥居を大きく描く。境内地の中央に屹立するという外見のみならず、それがもつ象徴性を示すものと考えてよい。「甲斐国志」は、「富士山ノ鳥居」であるとして、社殿の造立に先行して鳥居が立っていたであろうと考証している（巻71）。また、鳥居に架かる額には、神社名ではなく、「三国第一山」の5文字を大書する（9ページ参照）。「三国第一山」とは、富士山にほかならない。なお、慶応4年（明治元、1868）8月の由緒書では、神主小佐野弾正が社名を「富士大鳥居浅間社」と記述する。大鳥居は、名実ともに、この神社の中心的な施設であった。



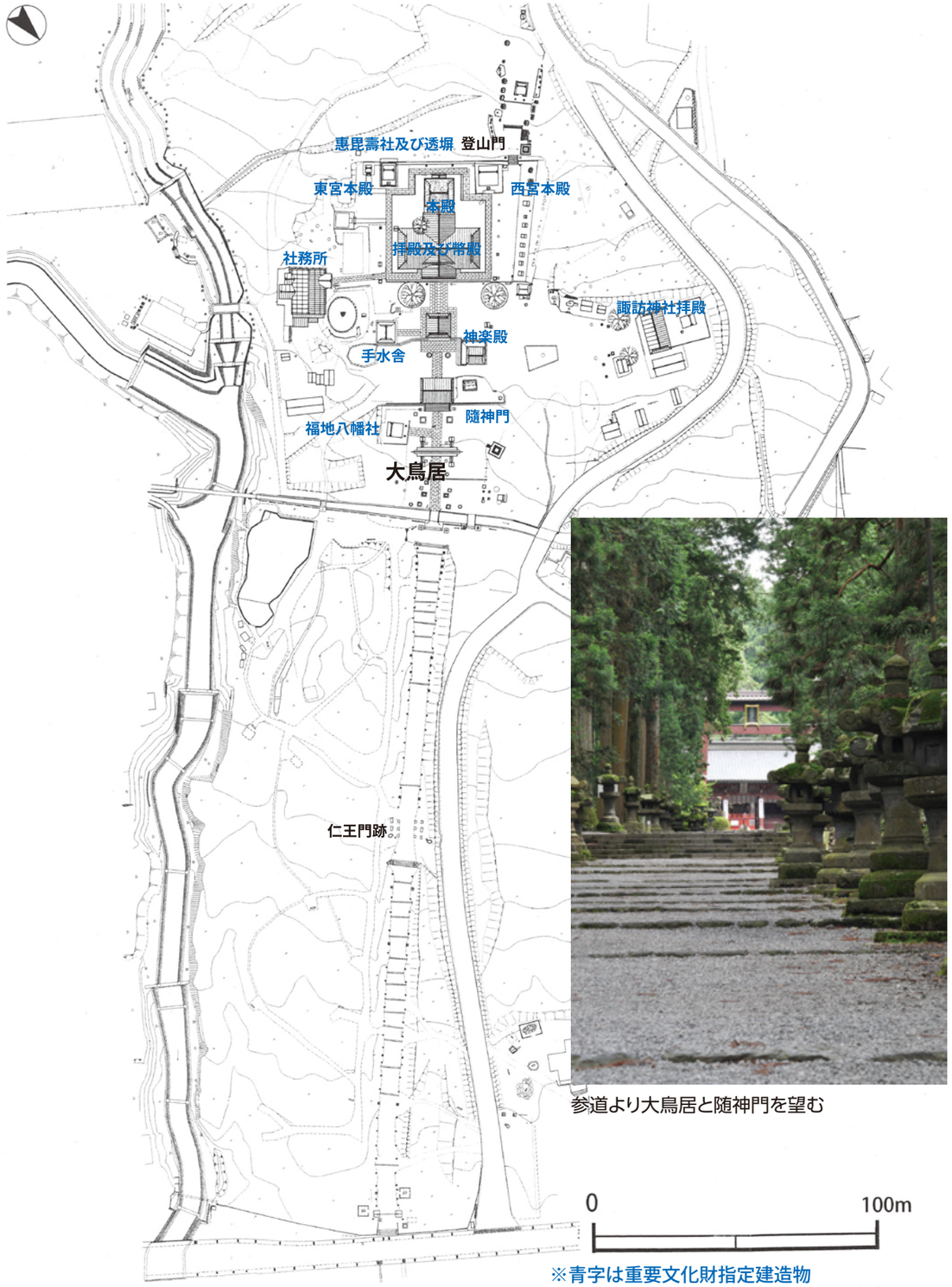
1-⑵〔浅間宮社〕　「富士山明細図草稿」

下掲の「富士嶽神社真図」が、16・17ページで紹介する「富士山明細図草稿」中の一葉を原図としたものであることがわかる。左上部のすやり霞に「注連澤半仙製図」の注記がある。半仙は、小澤（注連澤）寛信の雅号だろう。

冨士嶽神社真図　個人蔵

明治年間（1868～1912）

江戸時代に「富士浅間明神」「富士大鳥居浅間社」などの名があった現在の北口本宮冨士浅間神社は、明治初年に「冨士嶽神社」を称した。その後、同43年には「冨士浅間神社」に改めた。現社名となったのは昭和21年（1946）のことである。



※青字は重要文化財指定建造物

参道より大鳥居と隨神門を望む

北口本宮冨士浅間神社境内図

（『北口本宮冨士浅間神社建造物総合調査報告書』〔同神社、2016年〕）より転載

富士山大鳥居の造替

大鳥居にかかわる文献資料としては、「勝山記」の文明12年（1480）・明応9年（1500）の両年条が古い。ともに造営の主体ははっきりしない。16世紀末からは、その造営・修造には、都留郡を領した大名があたっている。寛永10年（1633）に谷村藩主となった秋元泰朝が、浅間社境内で最初に手がけたのも大鳥居への額「三国第一山」の奉納であった。泰朝・富朝・喬知の秋元氏三代は、大鳥居をはじめ、多くの社殿を造立・修造したが、正徳元年（1711）、武州川越（埼玉県川越市）へ転封となる。この結果、都留郡は幕領となり、神主や御師、上吉田村の村役人は、谷村代官あてに繰り返し助成を願い出ることとなった。しかし思うにまかせず、大鳥居はほかの社殿とともに荒廃の一途をたどった。これを救ったのが、江戸小伝馬町の豪商に出自をもつ富士行者村上光清である。境内では、享保（1716～36）の末年から延享年間（1744～48）にかけて、同行（どうぎょう）の資力に基づく工事が続いた。以後も、御師や富士講中、村民の手により護持されてきたが、規模が規模だけに、大鳥居の維持には相応の困難がともなった。その過程は、各造立・修造時に作成された文書や記録により、跡づけることができる。

大鳥居の建立・修造の歴史

年　代		前回との年代差	内容	造営主体など	高　さ*1		典　拠*2
文明12年	1480		建立	「三月廿日、富士山吉田取井立」			「勝山記」
明応9年	1500	20	建立	「吉田トリイ、卯月廿日タツ」			「勝山記」
文禄3年	1594	94	建立	浅野氏重			『市史』Ⅲ−48
正保3年	1646	52	修造	秋元富朝			『市史』Ⅲ−48
寛文6年	1666	20	建立	秋元喬知			棟札、『市史』Ⅲ−48
貞享5年	1688	22	修造	秋元喬知	4丈2尺9寸	13.0m	棟札写、図面164・166ほか
元禄15年	1702	14	修造	秋元喬知			棟札
元文元年	1736	34	建立	村上光清	（5丈6尺8寸8分）	（17.2m）	棟札、『市史』Ⅱ−925ほか*3
宝暦8年	1758	22	修造				『市史』Ⅲ−49
文化年間			−		5丈8尺	17.6m	「甲斐国志」
文政13年	1830	72	建立				棟札、『市史』Ⅱ−943ほか*4
明治22年	1889	59	建立		5丈8尺5寸	17.7m	北口本宮冨士浅間神社文書
明治45年	1912	23	修造				
昭和7年	1932	20	修造				
昭和29年	1954	22	建立				
平成26年	2014	60	修造				

註(1)「高さ」は、笠木の中央部の地上高。史料では「惣高」「高」と記される。笠木両端の最高部は、別に特記されるのが一般的である。
註(2)〔典拠〕は次のとおり。
・『市史』Ⅱ・Ⅲは『富士吉田市史』史料編第四巻〔近世Ⅱ〕、同五巻〔近世Ⅲ〕。数字はその資料番号。
・「図面」は「萱沼弥一郎家文書」の整理番号。写真が『北口本宮冨士浅間神社建造物総合調査報告書』（2016年）に載る。
・棟札はいずれも北口本宮冨士浅間神社蔵。
註(3)「高さ」は10・11ページの「5大鳥居図面」参照。
註(4)『市史』Ⅲ−51によれば、高さ5丈8尺5寸で計画されたらしい。

～大鳥居の式年造替～

平成26年（2014）に竣工した大鳥居の修理は、「式年大修理」と呼ばれた。前回、昭和29年（1954）完工の造替に際し、社務や氏子総代が連署する「決議書」（昭和24年2月15日「大鳥居再建ニ関スル書類綴」〔北口本宮蔵〕所収）には、「六十年を式年として建替へる習慣」といったくだりがある。その前回、明治22年（1889）の工事にも触れ、「今昭和二十四年は満六十年に相当する」と述べている。左下の表からもわかるように、江戸時代後半からは、60年を式年（決まった年数）として建立・修理する習慣が根付いていたことがうかがえる。庚申縁年を引くまでもなく、富士山やこれを祀る浅間神社では、60年を式年とする考え方が根強い。新倉の富士浅間神社や下吉田の小室浅間神社（ともに富士吉田市）では、60年に一度神体がまとう衣装を替える「御更衣祭」を催行している。これを「おめしかえ」と呼ぶ。

3昭和29年（1954）竣工
大鳥居造替関係資料
北口本宮冨士浅間神社蔵

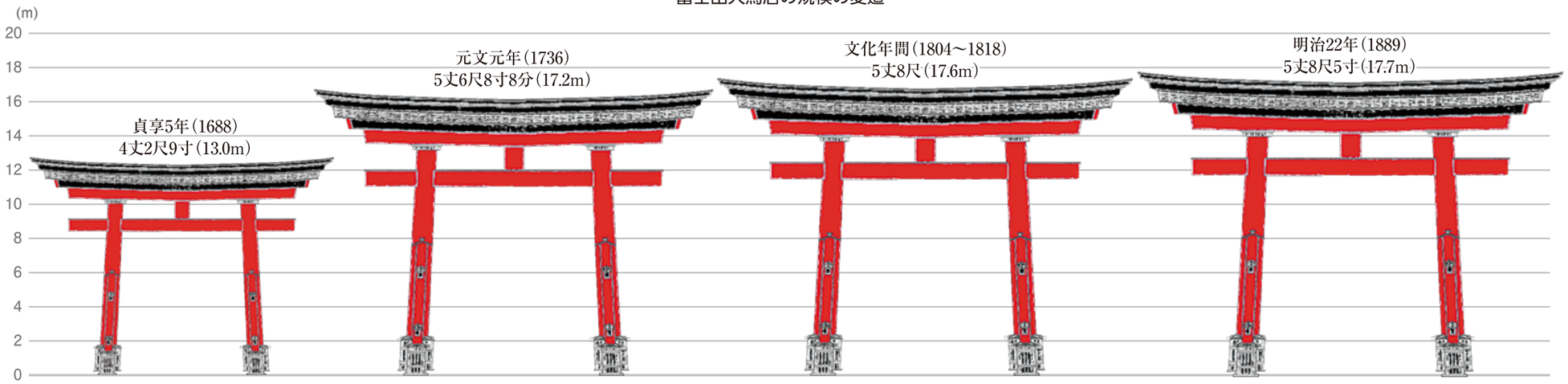
2良恕法親王筆「三国第一山」と
大鳥居の額

良恕法親王（天正2年〈1574〉～寛永20年〈1643〉）は、後陽成天皇の弟。天台座主を務めたほか、能書家としても知られた。大鳥居の額は、寛永13年（1636）、谷村藩秋元氏の初代泰朝の寄進になる。秋元氏は孫（実は曽孫）の喬知まで三代にわたって浅間社の社殿造営に尽くしたが、本額の寄進はその嚆矢となる事象として特筆される。

北口本宮冨士浅間神社蔵
縦147.6㎝×横47.2㎝

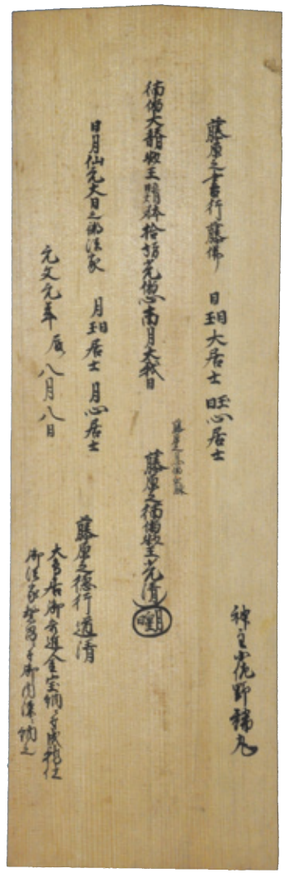
富士山大鳥居の巨大さ

富士山大鳥居の規模の変遷



大鳥居の造立や修復に関する史料は少なくない。それらをもとに8ページの表を作成した。しかし、その規模を明記するものは意外と少ない。数少ないデータにより、大きさの推移を図示してみた。時代を経るにしたがって、大きくなってきていることがわかる。現在では、明治22年（1889）造立のものよりは若干小さいようだが、木造としては国内最大級の鳥居であることは疑いない。

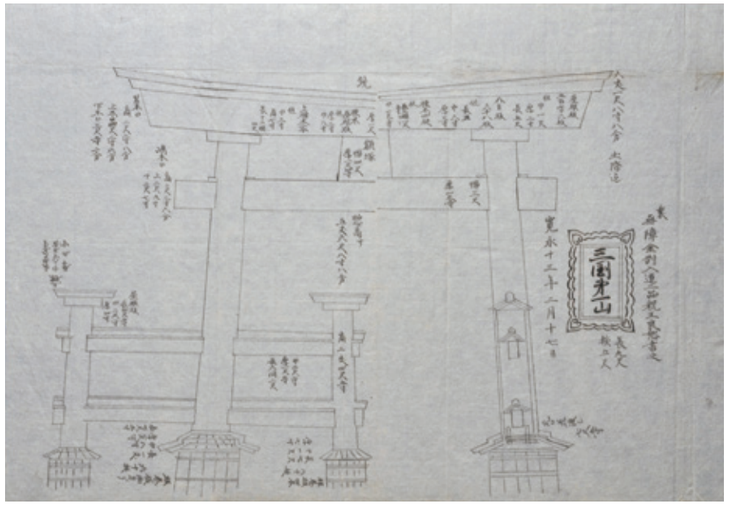
表　　裏



4 大鳥居造営棟札
元文元年（1736）

北口本宮冨士浅間神社蔵
縦45.3㎝×横14.4㎝×厚さ0.9㎝

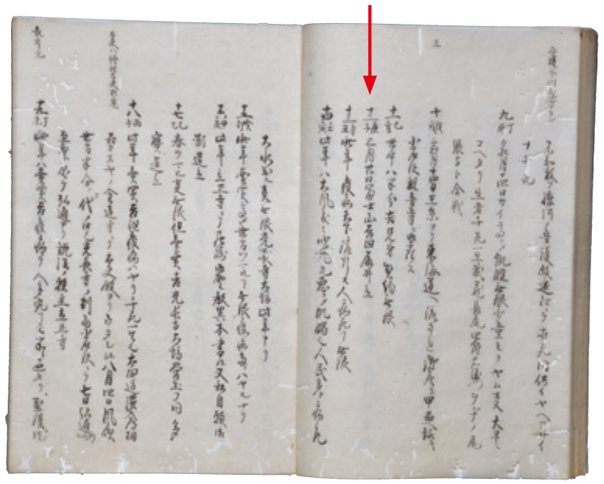
北口本宮冨士浅間神社には、25枚にのぼる棟札がある。元文元年（1736）の村上光清による造営の模殿の造営・修復を主導した。元文元年から延享2年抜（おみぬき、長谷川角行が始めた富士信仰の世界観を表す図像）の形を採っている。伝存する。このうち4枚が大鳥居の造営・修復にかかわ様を伝える棟札を掲出した。光清は本殿以下、多くの社（1745）に至る都合13点の棟札が残るが、いずれも御身



5 大鳥居図面
年未詳

個人蔵
縦28.0㎝×横40.7㎝

惣高を5丈6尺8寸8分（約17.2m）と記す。貞享5年（1688）修理時の4丈2尺9寸（約13.0m）を大きく上回り、19世紀初頭の5丈8尺（約17.6m、宝暦8年〈1758〉修理）を下回ることから、この間の図面と推定される。元文元年（1736）に村上光清が建立したときのものかもしれない。ただし、文政年間（1818〜31）の造立にかかわる文書では、一貫して「高サ五丈」「五丈余」と述べており、さらなる検討の余地を残す。

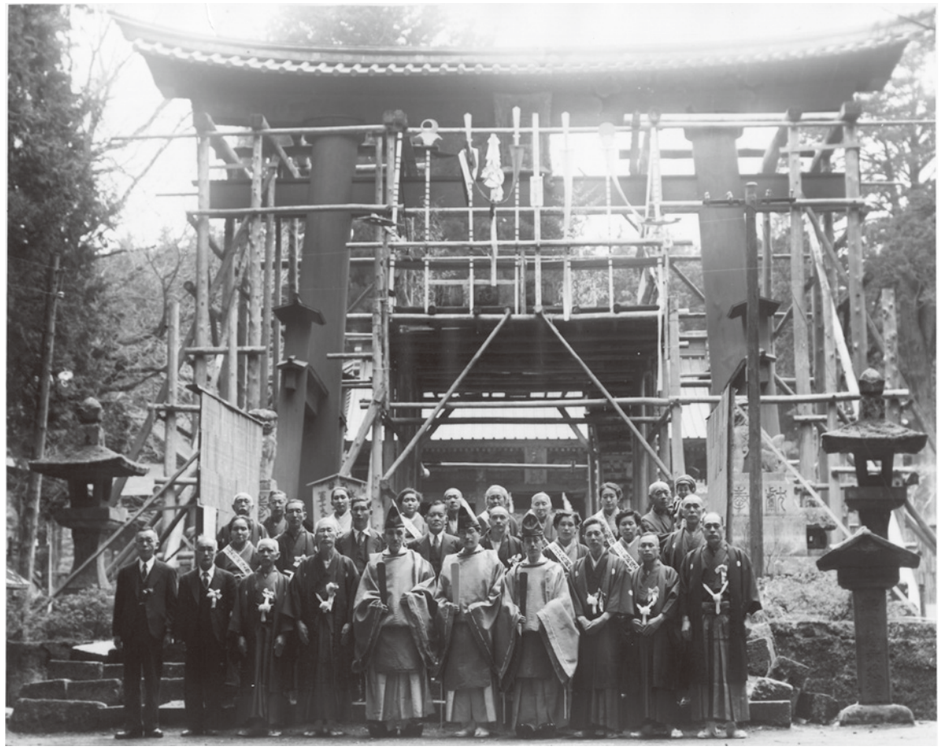


6「勝山記」写本
19世紀初書写

個人蔵
縦27.5㎝×横19.0㎝、全62丁

河口湖南岸に所在する法華寺院常在寺（富士河口湖町小立）周辺の僧侶が残した記録。文正元年（1466）から永禄6年（1563）の記事をもつ。浅間社の造営にかかわる記事も散見される。文明12年（1480）の条に、「三月廿日、富士山吉田取井立」と見える。「取井」は「鳥居」の当字だろう。

昭和の大鳥居造替 ～上文司家写真帳にみる～



①

②

③

①大鳥居前での記念撮影
②道を浄めつつ行列の先頭を行く神職
③馬上の宮司上文司明氏（左）と保存会副会長岩佐寿太郎氏
④上町（上宿）を進む稚児行列
⑤横町へ曲がる行列

④

⑤

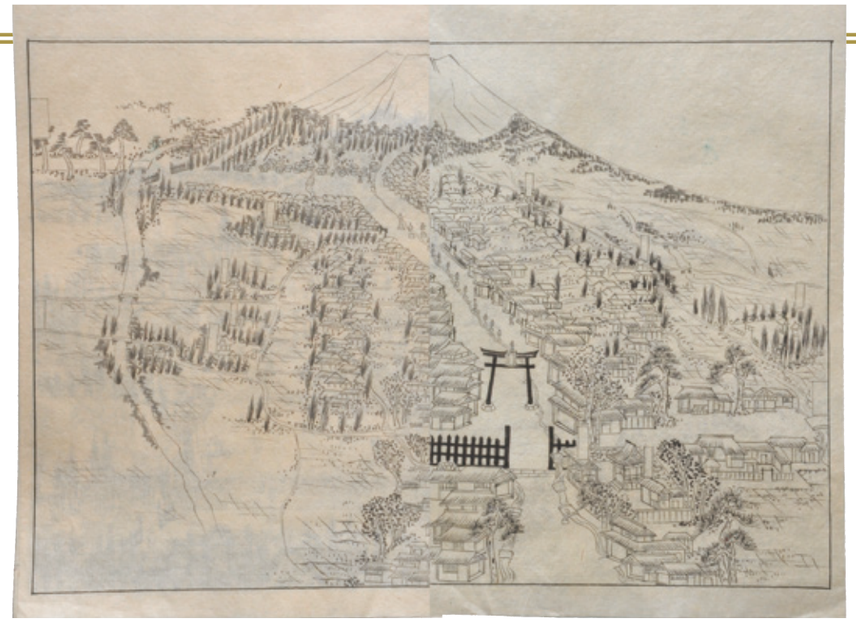
～昭和29年（1954）の造替～

昭和29年4月に竣工した大鳥居の造替に関する取り組みは、同24年2月に本格化した。8月には、「冨士山北口本宮冨士浅間神社大鳥居保存会」（富士山大鳥居保存会）が結成され、資金募集などの実務にあたった。同会の決算書によると、工事には275万円弱を要したという。竣工式は、4月11日に催行された。「大鳥居再建記録」の収める日誌によれば、雨がちだった前日までとはうって変わり、好天に恵まれたという。日誌は、神職や保存会のメンバー、随行する稚児たちの行列を迎える沿道について、「予想外ノ人出」で、「見物スルモノ各町共路傍ニ堵（かき）ノ如ク大ニ混雑ヲ極メタ」ものの、幸い事故なく執り行われたと喜んでいる。また、「写真班ハ各所ニテ撮影シ」と記録するが、まさにその写真が、当時北口本宮の宮司を務めていた上文司明氏（当時72歳）の令孫厚氏のもとに伝わっている。本項には、そのなかから5枚を紹介した。上文司家は、明氏以後三代にわたり宮司を務めているが、この間、祖父・孫二代が式年造替（昭和29年、平成26年〈2014〉）に奉仕したことになる。

７上文司家写真帳

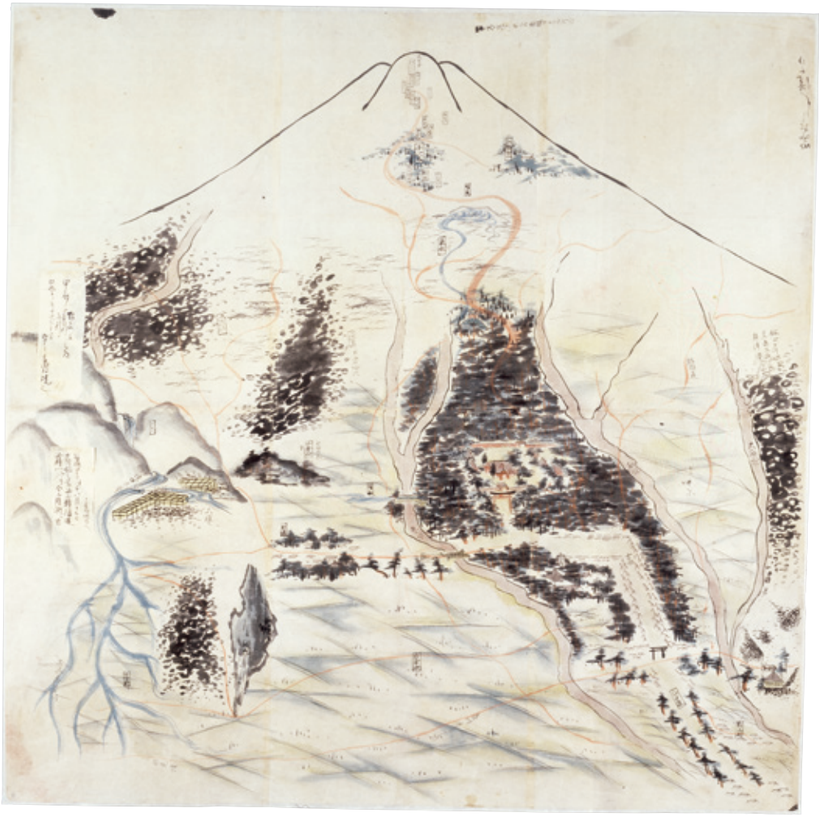
吉田町と唐銅鳥居

吉田町（富士吉田市上吉田）の北端に、銅製の鳥居が立っている。正確には、表面を銅板で覆ったコンクリート製の鳥居というべきかもしれない。現在のものは、昭和30年（1955）の造立だが、近年では富士山への北面の玄関口富士吉田市の象徴として広く知られるところとなった。”山仕舞いを告げる”の冠をつけて吉田の火祭を報じる新聞も、多くがこの鳥居のもとで燃え盛る松明の写真を掲載する。ところでこの鳥居、歴史資料には「唐銅鳥居」の名で登場してくる。江戸時代には、「からかねどりい」と呼ばれていたらしい。惜しくも先代の鳥居は、昭和17年（1942）に戦時供出されてしまったが、八角形に整えられた礎石に立ち、下端には亀甲紋を施すなど、精巧な造りであったことが、今に伝わる写真から理解される。ただし天明8年（1788）の建立と、その歴史は意外と浅い。同年御師中雁丸（なかがんまる）の檀家（得意先）であった複数の講中（「雁丸八講」の称がある）によって建立されている。寛政12年（1800）の大風で倒壊したものの、時の中雁丸の当主らの尽力によって、天保2年（1831）には再建を果たした。明治11年（1878）の再建は、「福地村冨士嶽神社」の「銅一ノ鳥居」として、神社が主導したようだ。しかし、山梨県へ宛てた願書には、「祠官代祠掌」を称した大友直衣とともに、「願主」として中雁丸うめが連署していて、同家の関与のほどがうかがえる。さて、吉田の町は、鳥居が立つ地点で甲府盆地へ通じる鎌倉海道、桂川沿いに北行する江戸道に結節していた。左ページにかねて、鳥居が18世紀も後半になって造立されたことになる。明治の末年、この鳥居の西側の足下に「登山道里程元標」がわかる。これらに重れた。かねての災害を受け、改修がなった登山道の基点とされたのである。こうして大鳥居に代わって地位を得た金鳥が山梨県により設置さての主役に取って代わったかの感が強い。その建造の経緯については、さらなる追究が必要だろう。居。”お出張り”がかつ



1−(1)〔上吉田宿〕　「富士山明細図草稿」

吉田町の北端は西方へ延びる鎌倉海道（甲府道）と北行する江戸道（富士道）に結節している。こうした外界との境界に鳥居が立っていることがわかる。川（用水）が町通の中央を流下する。鳥居が左側（東側）に立つのは、こちらの側を登拝する人びとが利用したからである。横町東端の村境にも唐銅鳥居の北同様に、柵が設けられていたことが知られる。このほか富士山大鳥居へと延びる浅間神社参道を描く点などに、「富士山明細図」との異同が認められ、興味深い。



9浅間神社ならびに富士山絵図〔森嶋家文書〕　都留市蔵
文化3年（1806）　53.7㎝×105.8㎝

東方に広がる耕地や用水を丁寧に描くから、「上吉田村絵図」の称を与えてもよいだろう。上吉田宿については、北東上空から鳥瞰的に図示するものが多い。その点、№13（4ページ）の構図は珍しい。

明治11年（1878）8月「銅一ノ鳥居之儀ニ付御願」付図
〔中雁丸文書〕　ふじさんミュージアム蔵

前年の暴風により銅鳥居は倒壊した。その再建工事願に付された図面。道路中央に建造されたことがわかる。

金鳥居現況

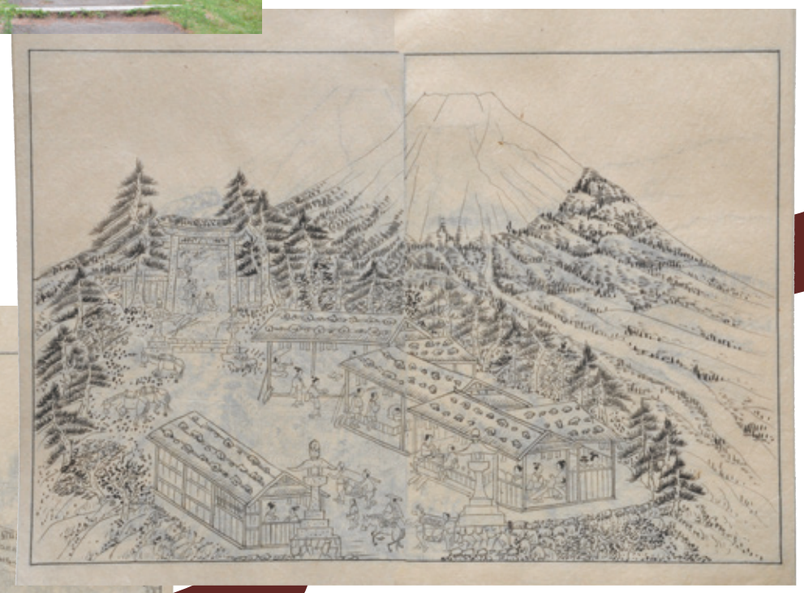
額には「富士山」と大書される。〔富士山の鳥居〕であることが、継承されている。

吉田口登山道上の鳥居 ～「富士山明細図草稿」にみる～

富士山においては、信仰空間を画す装置が鳥居であった。浅間神社の境内地から登山道へ踏み出す位置に立つ登山門が、呼称とは異なる鳥居の姿で表わされることに象徴的である。富士山内は植生や土地利用により三つに区分される。これが信仰にも反映していることを、それぞれの鳥居の所在地が教えてくれる。

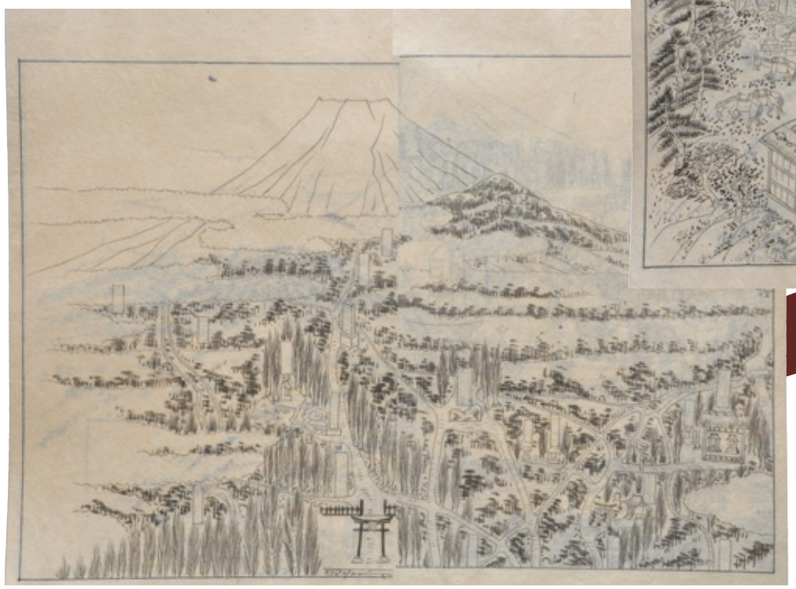
野山（耕地や里山として利用される領域、草山）と木立（森林帯、木山）との境界に鳥居が立つ。馬の乗入れはここまでとされた。「馬返シ」の所以である。「明細図」は、鳥居の下で笠をぬいで頂上に額ずく3名の道者を描く。前方には草を食む馬も見える。

1-⑷〔鈴原御馬返シ〕

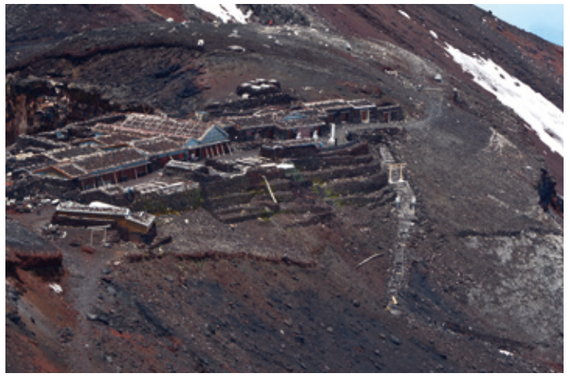


神社の境内と登山道を画す鳥居。古くから「登山門」と呼び慣わされてきた。延宝8年（1680）版行の「八葉九尊図」に、すでに鳥居の姿で表わされている。「草稿」のみに見られる構図のひとつ。

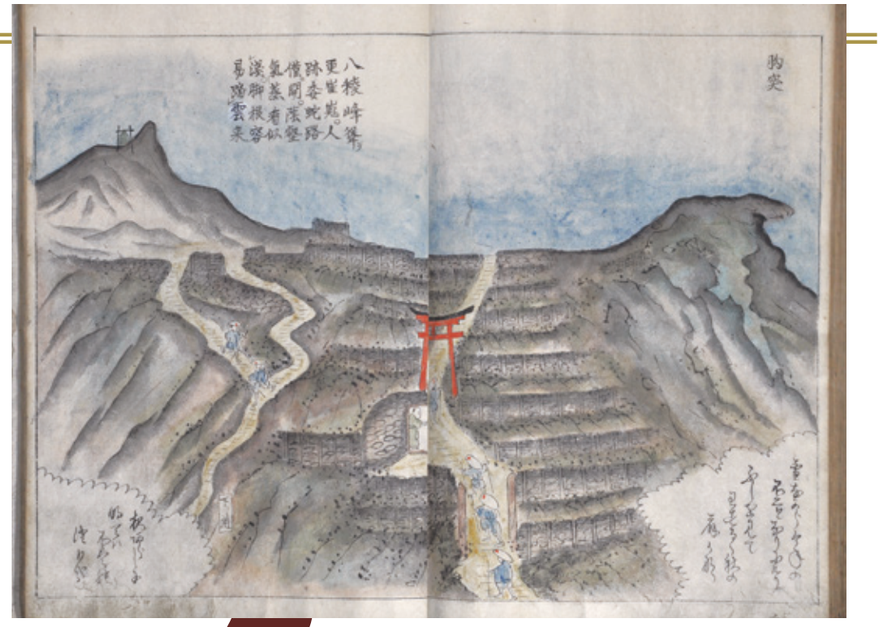
1-⑶（登山門）



絶頂（頂上）直下、傾斜が増す。石を積み、枠で固定して、通路入口を意味する鳥居が立つこんだ。下山道の鳥居（写真左）「胸突」である。登山道の両側にを確保していた。途上に絶頂へのとから、この細道を「鳥居御橋」と呼は近時の造立。



2013年6月撮影　　提供：山梨日日新聞社



〔胸突〕

「富士一山北口明細御絵図面」　　個人蔵

1-⑸〔中宮一之鳥居〕

木立（森林帯、木山）と毛無（火山礫帯、焼山）の境界を「天地境」と呼んだ。鳥居は失われ、原位置は特定できない。付近には、大日社をはじめとする中宮三社が祀られたほか、道者から役銭を徴収する小屋があった。

1「富士山明細図草稿」

吉田口登山道および山頂の要所要所を描いた画集に「富士山明細図」がある。全56構図からなり、吉田御師小澤寛信が、19世紀の中頃に描いたものと推定されている。この度の史料調査により、同人の末裔宅（代々小澤隠岐守を称した）において、その類本とみられる画集の一部の伝存が確認された。素描段階のもので、全32丁がこよりで綴じられていた。全34構図（5構図が重複）のうち、左に掲げた〔登山門〕ほか3構図は「明細図」にはないものである。

御坂峠の鳥居 ～西方からの入口～

甲府盆地から富士山を目指す道者にとって、最も一般的なルートが鎌倉海道すなわち御坂峠越えであった。律令時代の官道・甲斐路に起源し、鎌倉時代には日蓮や時宗の二祖真教も、この道をたどった。稜線に立ったすべての旅人が、河口湖を前面に、広大な裾野を左右に伸ばす富士の姿に驚嘆したに違いない。「甲斐国志」も「倒扇ノ如ク、麓ヨリ抜出シ、前ニ河口湖ヲタタヘ、絶勝エガクガ如シ」と、その景勝ぶりを讃えている（古跡部「御坂」の項、巻53）。もはや、ここに材を採ったとする北斎の「甲州三坂水面」や広重の「甲斐御坂越」を引くまでもないだろう。この峠は、まさに聖なる地への入口であった。川口村（河口村・富士河口湖町）が、「甲斐国志」の編纂に際して提出した絵図は、稜線上に鳥居を描き「富士山一ノ鳥居」としている。しかし、「国志」が編纂された19世紀初頭に、峠に祀られた「天神祠」（祭神は日本武尊）を管轄していたのは、国分村（笛吹市一宮町）の神主沓間若狭であった。慶応4年（明治元、1868）の由緒書では、河口の御師たちが「御坂峠天満宮」を浅間神社の「社外末社」の一社として書き上げているから、この間に権利の異動がったとみられるが、その経緯ははっきりしない。

鎌倉海道（甲府道）は、川口村から御坂峠にかかる。鞍部に鳥居を描き、「富士山一ノ鳥居」と付箋を加えている。

10川口村（河口村）絵図〔森嶋家文書〕　都留市蔵
文化3年（1806）　53.5㎝×69.0㎝

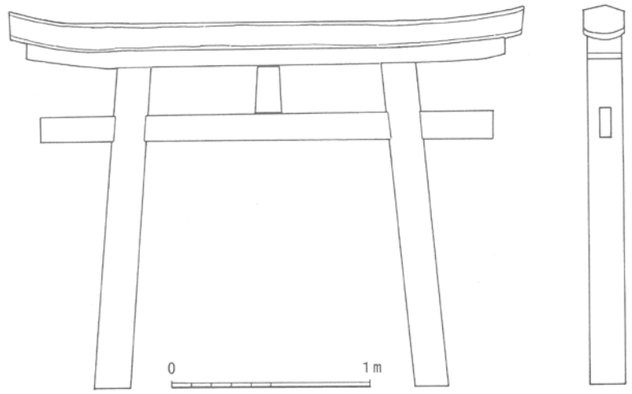
御坂峠から望む富士山　富士河口湖町河口

景勝の地として知られた旧御坂峠だが、現在では木が生い茂り眺望が効かない。写真は国道137号上から撮影した。新御坂トンネルを抜けると、雄大な光景が広がる。なお、旧峠には天神が祀られる。鳥居は失われ、旧在地も定かでない。

御坂峠の天神祠

～峠に祀られる神～

南巨摩郡身延町（旧西八代郡下部町）の御弟子から折門へ越える小さな峠をタワ峠という。鞍部を「タワ」と呼び、「たわの宮」という小祠を祀っている（『日本の民俗　山梨』）。峠には、多く神が祀られる。山梨県の東部では、「天神」を祀る事例が多く、各所に「天神峠」が所在している。笛吹市境川町大窪から芦川町鶯宿へ越える鶯宿峠も別名を天神峠といった（「甲斐国志」巻25）。また、八代町奈良原から芦川町上芦川をつなぐ鳥坂峠の石祠も「お天神様」と呼ばれているという。山梨県富士山総合学術調査研究委員会の考古班による調査により、その近傍で倒壊している推定高約180㎝の木製鳥居が確認された。「鳥坂峠」の呼称も、「鳥居坂」の転訛と考えてよいだろう。なお、「天神」とは、天の神、あまつかみであって、菅原道真を仰ぐ天満宮とは限らない。御坂峠の天神も、日本武尊を祀っていた（「国志」巻58）



鳥坂峠に所在した鳥居（実測図）
『富士山－山梨県富士山総合学術調査研究報告書2－』〔資料編〕（2016年）より転載

河口浅間神社 ～もうひとつの大鳥居～

貞観6年（864）の富士山噴火は、膨大な量の溶岩をその北西麓に押し流した。青木ヶ原丸尾溶岩流である。甲斐側に生じた甚大な被害を前に、翌7年末、朝廷は八代郡に「浅間明神祠」を祀った（「日本三代実録」）。その後身の可能性が最も高いと考えられているのが、河口（富士河口湖町河口）に鎮座する浅間神社である。眼前に広がる河口湖を隔てて溶岩流を望む立地は、富士山の噴火を鎮める役割を期待された神社として、まことにふさわしい。降って、江戸時代。社殿は歴代領主により、護持されていくこととなった。元禄10年（1697）、谷村藩主秋元喬知は、高さ5丈4尺（約16.4m）に達する鳥居を寄進した。これより先に自身が造立した吉田大鳥居が4丈2尺9寸（約13.0m）だったことを考えれば、その巨大さが知れよう。額字は後西天皇の皇子公弁法親王に依頼した。これは、祖父泰朝（実は曽祖父）が吉田のそれを良恕法親王に願った故事に倣ったものだろう。吉田大鳥居と同様、富士山そのものを表す「三国第一山」の5文字を掲げるが、こちらも旧例を踏襲したのだろうか。とはいえ、神社の鳥居として参道に立ち、富士山に正対する当社の鳥居は、富士山への入口に立つ吉田の鳥居とは、おのずからその性格を異にするものと考えるべきだろう。なお、幕末には、その高さが5丈5尺（約16.7m）余に達したとする記録もある（「冨士一山北口明細御絵図面」）。

拝殿と神木七本杉の一　（一号杉）

浅間神社の鳥居と額　富士河口湖町河口

「甲斐国志」は高さを5丈4尺（約16.4m）、元禄10年（1697）に秋元喬朝（喬知）が再建したものとする。これにしたがえば、貞享5年（1688）に同人が吉田に建立した大鳥居（4丈2尺9寸、約13.0m）の大鳥居を大きく上回っていたことになる。額字は後西天皇の皇子公弁法親王（寛文9年〈1669〉～正徳6年〈1716〉）の筆になる（「国志」ほか）。なお、現在の鳥居は、昭和40年（1965）に造立されたもので、コンクリート製。右脚元に礎石のひとつが残る。

新倉浅間神社 ～富士山に正対する鳥居～

御坂山地から枝分かれして南西に延びる山地（「府戸尾根」の称がある）が、河口湖周辺と富士吉田とを画している。新倉（富士吉田市）の集落は、山地の東麓、すなわち吉田側に位置するが、その産土富士浅間神社は、先の山地から南方へ突き出た尾根の中腹に鎮座する。尾根の先端は、さらに半島状に吉田に突き出し、小舟山と呼ばれていたが、1960年代の中央自動車道富士吉田線の建設工事にともない姿を消してしまった。さて、「日本紀略」承平7年（937）の条に、「十一月某日、甲斐国言（もう）す、駿河国富士山の神火、水海を埋むと」という、きわめて断片的な記述がある。この噴火については、富士山山頂下から噴き出し、冒頭の山地の裾を伝って上暮地まで流れ下った剣丸尾第一溶岩に比定する説が有力だ。新倉の地内では、湖沼堆積物が確認されている（『富士吉田市史』史料編一〔自然・考古〕附図「富士吉田市周辺地域第四紀地質図」）。小舟山に至る丘陵地によって形成された沼沢地を剣丸尾溶岩が飲み込んでいった、そうした光景を想像することは、許されるだろう。貞観の噴火では、本栖・剗（せ）の両湖を埋め、河口湖に迫った溶岩流を眼前にして、浅間神社が河口湖北岸の地に祀られた。同様の祭祀が、新倉でもなされたのだろう。承平の噴火を受け、剣丸尾を眼下に見下ろす高台に浅間神が祀られた。これこそ新倉の浅間神社の起源ではなかったか。富士山に真向かう社殿が建てられ、「三国第一山」と富士の名を記した額を掲げた鳥居が立つ。鳥居の下では、噴火を受けて下向した勅使がもたらした面を着け火伏の舞を舞ったという（『新倉の民俗』）。吉田の大鳥居とは異なる鳥居が、ここにも存在している。

24 鳥居越に富士山を望む　富士浅間神社（富士吉田市新倉）

11 鳥居額「三国第一山」　富士浅間神社（富士吉田市新倉）蔵
年未詳　縦191.5㎝×横86.4㎝

「三国第一山」の額字は、「勅筆」と伝承されてきた（享保15年〈1730〉「新倉村高反別指出明細帳」ほか）。しかし、銘文などは認められず、制作年や筆者は定かでない。これとは別に、文字を金属で表わした額も伝存している。

鳥居地峠の鳥居 ～東方からの入口～

「甲斐国志」は〔古跡部〕に「明見ヨリ駿州駿東郡并ニ吉田ヘノ古道」の項を立て、明見湖（蓮池、富士吉田市）のほとりの二王坂（仁王坂）から「鳥ウチ峠」にかかり、内野村（忍野村）・平野村（山中湖村）、さらには甲斐・駿河・相模三国の国境地帯を経て、駿河国駿東郡日向村（静岡県小山町中日向）へと通じる道の存在を説いている（巻53）。三国山稜を介して駿河国東部と富士山の北面を結ぶこの道は、「鎌倉道」とも呼ばれた。富士へ向かう道者は、甲駿国境をヅナ峠で越え、忍草村（忍野村）から大明見村（富士吉田市）へ向け、小さな尾根をみられる。かつて峠越えた。峠道を、忍草・内野の側では鳥居地峠、明見側では鳥打峠と、それぞれ呼んだ。ともに「鳥居内峠」の転訛とには、信仰領域の内と外とを画す鳥居が立っていた。忍草の浅間神社に伝来している「富士大権現」の額は、この鳥居に架かっていたと伝承されている。下掲のとおり、額裏には正徳3年（1713）の造立を伝える銘文がある。また、同社の仁王門は、冒頭で触れた仁王坂から移されたと伝えられる。同神社の仁王門に安置される仁王像の胎内からは、正徳元年の修理を伝える木札が見つかっている。さて、鳥打峠に居住して、鳥居の祭祀にあたっていたと伝承されるのが、大明見の柏木家である。同家はまた、富士の御師としても活動し、甲府盆地の東部日川上流部（甲州市大和町）に檀家（得意先）をもっていたが、いつの頃か、大明見へ転居したという（『大明見の民俗』ほか）。忍草へ移った二つの資料に、ほぼ同時期の年号が記されているのは、偶然ではないだろう。正徳年間（1711～16）ころ、峠を挟んで信仰世界をめぐる秩序の再編があったのかもしれない。なお、現在では、県道717号山中湖忍野富士吉田線の鳥居地トンネルが、旧道直下を貫いている。

浅間神社　忍野村忍草

現在、社頭の鳥居には「浅間神社」の額が架かっている。

鳥居地峠大明見側の麓より北西方面を望む

写真中央、大明見と小明見を画すように半島状に延びる尾根が西ノ尾（背戸山）である。その背後に明見湖（蓮池）が所在する。小明見の地内からこの丘陵地へのアプローチを仁王坂と呼ぶ。

裏

前宝御納奉

正徳三年巳ノ六月吉日

武州江戸本郷春木町一町目　伊右衛門

三左衛門

喜平次

12 鳥居額「富士大権現」

正徳3年（1713）

浅間神社（忍野村忍草）蔵

縦100.0㎝×横53.0㎝

額裏に奉納者の名および住まいが朱書されている。江戸の本郷春木町一丁目は、現在の文京区本郷四・五丁目にあたる。ここにはかつて富元山瑞泉院と号す天台宗寺院・真光寺が所在した（廃寺）。揮毫した「僧正常然」は同寺に連なる僧侶であろうか。忍野村指定文化財。

～仁王坂と仁王像～

忍草の浅間神社には、忍野村の文化財に指定される仁王像一対が伝わっている。像容や光背からは、四天王のうちの二体と考え（二天像）、安置する門も二天門とするのが適当かと思われるが、古くから仁王像、仁王門と呼び慣わされてきた。「甲斐国志」も「仁王門」として、別当の東円寺の管轄下にあったと記している（巻71）。さて、これらの尊像ならびに門は、かつては鳥居地峠を挟んで反対側に所在したと伝承されている。明見湖（蓮池）の近く、富士吉田市小明見地内には仁王坂（おにさか）と呼ばれるところがあり、その地名は、この仁王像・仁王門に由来するのだという。小明見には、「（仁王像の足の裏に）明見と書いてある」といった言い伝えもあったが、近時の修理では、そのような墨書銘は確認されていない。ただ、像内から正徳元年（1711）の修理について記す木札が発見された。この頃、峠を越えて、移築・移転されたものと考えられる。仁王像の造立時期も、少なくとも江戸時代の初頭まではさかのぼってよいだろう。

浅間神社仁王像　浅間神社（忍野村忍草）

『忍野村誌』第一巻（1989年）より転載

企画展「富士山大鳥居ー吉田口登山道の起点ー」展示資料

No.	資　料　名	年　代	所　蔵　者	掲載頁
1	「富士山明細図草稿」〔上吉田宿〕ほか	19世紀半ば	個　人	6・15・16・17
2	良恕法親王筆「三国第一山」	寛永13年（1636）	北口本宮冨士浅間神社	9
3	昭和29年（1954）竣工大鳥居造替関係資料	昭和24年～29年	北口本宮冨士浅間神社	9
4	大鳥居造営棟札	元文元年（1736）	北口本宮冨士浅間神社	10
5	大鳥居図面	17世紀後半カ	個　人	10
6	「勝山記」写本	19世紀書写	個　人	11
7	上文司家写真帳（昭和29年竣工造替関係）	昭和29年（1954）	個　人	12・13
8	大鳥居式年建替工事請負契約書	昭和25年（1950）	北口本宮冨士浅間神社	ー
9	「浅間神社ならびに富士山麓絵図」〔森嶋家文書〕	文化3年（1806）	都留市（ミュージアム都留）	14
10	「川口村（河口村）絵図」〔森嶋家文書〕	文化3年（1806）	都留市（ミュージアム都留）	18
11	鳥居額「三国第一山」		富士浅間神社（富士吉田市新倉）	21
12	鳥居額「富士大権現」	正徳3年（1713）	浅間神社（忍野村忍草）	22

パネル展示資料

13	上吉田村絵図	江戸時代（19世紀カ）	個　人	4
14	富士山麓絵図	明治15年（1882）	山梨県立博物館〔甲州文庫〕	5
15	富士山頂写真（鳥居御橋付近）	平成25年（2013）撮影	山梨日日新聞社提供	16

～表紙写真について～

表紙は二枚の写真を合成したものです。境内には木々が鬱蒼と茂り、大鳥居付近からの眺望は効きません。鳥居の貫と随神門の間に配した富士山は、東方約200mを南行する県道701号富士上吉田線上から撮影したものです。「甲斐国志」の〔大鳥居は富士山に対する鳥居であって、社殿が建立される以前から建てられてきたのだろう〕という推定にしたがえば、鳥居越しに富士山頂を拝することができたのかもしれません。その情景はこのようなものだったのではないでしょうか。

山梨県立富士山世界遺産センター企画展

富士山大鳥居 ―吉田口登山道の起点―

協力者（順不同）
小澤輝展、志村政文、注連澤一仁、上文司厚、中村力、村石眞澄、渡邊主計、渡邊平一郎、渡辺稔、渡辺美穂、北口本宮冨士浅間神社、浅間神社（忍野村）、ふじさんミュージアム、富士浅間神社（富士吉田市新倉）、ミュージアム都留、山梨県立博物館、山梨日日新聞社

本誌は企画展「富士山大鳥居ー吉田口登山道の起点ー」（令和元年７月24日～９月23日）の概要を紹介した展示解説である。実物展示以外の資料も含まれている。
執筆・編集は、当センター調査研究スタッフ（堀内亨・堀内眞・根岸崇典）が担当した。

令和元年(2019)年7月23日発行
編集・発行　山梨県立富士山世界遺産センター
〒401-0301
山梨県南都留郡富士河口湖町船津6663-1
TEL 0555-72-2314
印　刷　株式会社 島田プロセス
〒409-8829
山梨県中巨摩郡昭和町清水新居1534
TEL 055-233-8829